

ガネーシュ神、『マハーバーラタ』の筆記者

スワミ・シャーンターナンダ

『マハーバーラタ』は、『ラーマヤナ』とともにインドの二大叙事詩の一つで、偉大な賢人ヴェーダ・ヴィヤーサが作りました。『マハーバーラタ』は 10 万以上の対句から成っており、その長さは古代ギリシャの有名な叙事詩、『イリアス』と『オデュッセイア』を合わせた長さの約 4 倍になります。

マハーは「偉大な」という意味で、バーラタは、伝説上のバーラタ王を指しています。彼は、叙事詩の中の主な英雄たちが属していた王朝を築き上げました。「バーラタ王朝の偉大な叙事詩」の中では、遠い昔から人間の状況には付き物の正義と不義の力の間の壮大な戦いが鮮やかなイメージで語られています。

これは『マハーバーラタ』がどのようにして書かれることになったかについての話です。

『マハーバーラタ』の冒頭に賢人ヴィヤーサは、この叙事詩の構想が元はビジョンとして表れたと説明しています。

このビジョンの後の3年間で、ヴィヤーサは心の中で『マハーバーラタ』の詩節を考え出しました。そして彼はこの神聖な叙事詩を人類に残したいと願い、それを書き記す知性と持久力のある筆記者を探しました。ヴィヤーサは宇宙の創造者であるブラフマー神について瞑想し、助

けを求めました。ブラフマー神は姿を現し、ヴィヤーサに、ガネーシュ神に祈って筆記者になってもらうように頼みなさいと勧めました。

厳然としたヒマラヤ山脈の麓にある——葉の茂った木々や、香りの良い花々で囲まれ、近くで数匹のシカが草を食べている——森のいおりの中で座り、ヴィヤーサはガネーシュ神について瞑想しました。やがてゾウの頭をした神が賢人の前に現れました。大いなる尊敬を込めて、ヴィヤーサはガネーシュ神に、自分が作った叙事詩を書き留めてください、と頼みました。ガネーシュ神は一つの条件を付けて、承諾しました。それは、彼が書いている間、彼のペンは決して止まらないということでした。つまり、ヴィヤーサは止まったりためらったりすることなく口述しなければならないことを意味しました。

初め、賢人ヴィヤーサは詩節を思い出すのに時間が必要だと考え、当惑しました。最終的には、彼は解決策を思い付きました。彼はガネーシュ神の条件を受け入れ、その代わりに、ガネーシュは書く前にまず詩節を理解することを、条件として出しました。ガネーシュ神は同意し、賢人は口述を始めました。

ヴィヤーサは次から次へと詩節を朗唱しました。時折彼はより複雑な節を朗唱し、ガネーシュ神はその意味を理解するためにゆっくりと書くのでした。このようにして、ヴィヤーサは次の節を思い出す時間を確保し、朗唱を続けることができました。

ガネーシュ神は、賢人が朗唱した言葉を一言も漏らさず一生懸命に書きました。彼は書いて、書いて、書き続けました——突然、書き続けている真ただ中で、羽根ペンが壊れてしまったのです！ 休まずに書く約束したので、ガネーシュは自分の牙を1本折り、インクを付けてペンとして使いました。ですから、筆記は中断することなく続けられました。このような理由で、ガネーシュの名前の一つはエーカダント、「1本の牙を持つ者」となったのです。

やがて、ヴィヤーサの口述に終わりが来ました——『マハーバーラタ』の完成です。ガネーシュ神は彼の牙を置きました。彼らが作り上げたものは傑作であり、深遠な教えの宝庫であり、サーダナーに関し、また人生のすべての段階とあらゆる社会的状況における人間の存在に関する 10 万を超える詩節でした。そして、この知識すべてが、後世の人々のために記録されたのです。

その後何世紀、何千年もの間、今日に至るまで、人々は『マハーバーラタ』を読み、学んできました。インドにいる多くの人々、また多くのインド系の人々は、『マハーバーラタ』の物語を聞いて育ちます。精神修行としてこの教典のすべての節を朗唱すると誓いを立て、長い時間をかけてこの実践をする人たちもいます。その上、700 の詩節から成る教典である『シュリー・バガヴァッド・ギーター』は、『マハーバーラタ』の一部で、世界で最も広く敬われている教典の一つです。それは、何世代にもわたる探究者たちに、この人生で、どのように徳のある生き方をするか、どのようにして真理の知識を得られるか、助言しています。

賢人ヴィヤーサの『マハーバーラタ』の膨大な口述とガネーシュ神がそれを休むことなく記録したことは贈り物——恩恵——でした。その影響力は、言い尽くすことなどできません。読むごとに、朗唱するごとに、そして、演じるごとに、『マハーバーラタ』は人類に成果をもたらし続けます。

